

## 「根源的な問いかけ」

### 創世記 3章8～9節 、 詩編 126編5～6節

聖学院大学大学院 客員教授 稲田 敦子

ちょうど2週間前のことですが、東京の杉並区の中央図書館の花壇に<アンネ・フランクのバラ>といわれるバラの株が8株ほど植えられました。この図書館は、『アンネの日記』が無残にも破られるという被害を受けた図書館の1つです。この<アンネ・フランクのバラ>は、もとは<アンネ・フランクの形見>と言われ、ユダヤ人であったアンネの隠れ家の裏庭に咲いていたバラを品種改良して育て名づけられたものです。杉並区とのかかわりは少し前にさかのぼり、1974年に『アンネの日記』を読んだ杉並区の高井戸中学の生徒達が、その感想を文集にまとめて、アンネのお父様のオットー・フランク氏に送ったところ、交流が続き、バラが3株送られてきたのです。この中学では大事にこのバラが受け継がれて、綺麗な花を毎年咲かせています。今ではいろいろな所にこのバラが育てられていますが、花自体はそれほど大きくなく、花びらが密集して咲くのが特徴で、特別なものというよりごくふつうのバラです。このようなバラをめぐる、あの隠れ家に住まわざるを得なかったアンネの人生が逆説的に映し出されているように思い知らされます。厳しい状況のなかで、ふつうの日常の暮らしをかけがえのないものとして営む努力をしいられた人たちが、大切に育てたバラだということに非常な重みを感じざるを得ません。杉並区では、今後2年くらいをかけて、区内のすべての図書館に、この<アンネのバラ>を植えることにしているということで、毎年咲くバラを見て、アンネの平和への願いを心にとめたいということでした。

今年(2014年)は第二次世界大戦が終結して69年になりますが、「時間がいくら経過しようが、大戦の記憶を振り返ることに終止符は打たれない」とドイツの大統領は語りました。この大戦中に身の危険を顧みずユダヤ人の命を助けた人々のなかで、あまり知られていない<中国のシンドラ>と言われる方がいます。元ウィーン総領事館の外交官の何鳳山(かほうさん)という方です。ここには、中国からの留学生の方々もおられますが、2009年の3月から4月には、上海でこの外交官を顕彰する資料展が開かれ、ご遺族が出席されました。この何鳳山(かほうさん)は、ミュンヘン大学で学び国民政府の外交官として1938年から約2年間ウィーン総領事を務めました。この年の3月にオーストリアに侵攻したナチスは直ちにユダヤ人への迫害をはじめたのです。彼らの銃口におののく18万5千人のユダヤ人たちにとって、唯一の活路は国外に脱出することだったのですが、関係各国はナチスとの関係悪化を避けて、積極的にその対応をしないままでしたので、出国するためのビザを入手することは、極めて困難でした。そのような状況で、この何鳳山は自らの判断で領事館に頼み込んだユダヤ人たちにビザを発給したのでした。途中でこのことを知った本国政府による緊急禁止令をも押し切って、ひたすらビザを発給したといわれています。退任までにどれだけのビザを発給したのかそれを証明する資料は残っていないようですが、上海に避難してきたユダヤ人だけでも1万8千人を超えておりその多くはウィーンからの難民だったということでした。その方たちの子孫が上海での顕彰展を開く原動力になった

のです。

この何鳳山(かほうさん)をつき動かしたのは、何だったのでしょうか。彼は幼い時に両親をなくし、教会による援助の施設で育ったことから、聖書に触れ多くの御言葉を聴く機会がありました。しかし非常に厳しい現実の中でどのように生きてらよいか、深い苦悩があったと思われます。そのような中で本当につき動かされることになったのは、「闇の業をすてて、光の武具を身につけようではないか」という真実のたましいに触れるよびかけです。そしてさきほどお読み頂いた神様からの「どこにいるのか」という呼びかけです。以前の訳ですと、「あなたはどこにいるのか」となっていますが、彼はこの問いかけを心の一番深いところで受け止めました。これは彼のみならず、現在の私たちの存在に対する問いであり、根源的なよびかけです。「あなたはどこにいたのか」という過去形ではありません。現在の私たち自身への問いかけです。これは、普遍的で、そして根源的な問いといえるでしょう。

私が衝撃を受けた本の一つに、波多野精一氏の『時と永遠』という本があります。随分昔のものとなりますが、若いころに時の問題や永遠の意味を考え、あれこれ考えあぐねているときに出会った本の影響は非常に大きいものです。そこで「永遠は、種々の意味において時や時間性を超越、克服する何ものかと考えられる」と述べられています。そしてコヘレトの言葉3章11節には、時間の有限性を超え、永遠性にいたる道筋をすでに備えてあるというしるしが示されております。この永遠性にいたる道筋を備えた方は、この世での有限性の死に打ち勝ち復活をとげられた主であり、このしるしに、日々の生を支える<いのち>の営みの根源的な意味がみいだされるのです。

私たちの人生は一回限りです。時間のあととどりは無いのです。季節はめぐり自然の時間は確実に過ぎていきます。バラの季節も終りを迎えます。しかし時計によってはかかることのできない、永遠につながる私たちの命を生みだされた時間があるのです。この時間を生きること、一人ではなく共に生きる希いの根幹がそこにあるということに心に覚えたいと思います。私たちの人生では、体験することはたくさんあるでしょう。生活圏がかわり、新しい環境に身をおくと、いろいろな体験をしたいと思います。そうしたさまざまな体験の中で、自分自身の内的な世界に奥深く関わる時、それは表面的な体験から経験として深化されていきます。森有正先生はこの経験の内にある出会いと新しい事実の発見、そういうものを通して自分の心の中に「内的な促し」がよびさまされていき、自分の「内なる人」がかえられていくといわれます。自分の中にそれを見出す人は、他の人にもそれがあつて知らされるでしょう。そのことがこの社会で共に生きる本当の基礎になるのではないのでしょうか。それは、さきほどあとから読んでいただいた詩編126編の5～6節にあります涙をもって種をまく人の歩みへとつながるものでしょう。私たちはともに「今の時」を用いて、根源的な問いかけに答えていきたいと思っております。

2014年6月27日 聖学院大学 全学礼拝